様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３３９１９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７７０１３６

研究課題名（和文）中国近世北方系「家将もの」通俗文芸の普及に関する考察―構造形成期と量産期から―

研究課題名（英文）The study on Popularization of the Series of Early Modern Popular Literary Works about Northern Chinese General Families

研究代表者
松浦　智子（MATSUURA, Satoko）

名城大学・理工学部・助教

研究者番号：４０６４８４０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、楊家将など北方の武将一族が数世代にわたり活躍する姿を描く「家将もの」文芸が、近世中国の文化・社会に普及した要因を考察した。まず、山西地方に残る文物（石碑や戯劇レリーフ等）調査を通して、「家将もの」文芸の物語構造の形成に実在の宗族が関わっていたことや、戯劇という視聴覚文芸が挿画付き出版物（「家将もの」文芸を含む「成化説唱詞話」など）の出現に連続性を持っていた可能性を示す知見を得た。また、この知見と新出資料の内府色絵本『楊文広征蛮伝』をあわせて検証することで、「家将もの」等の通俗文芸がビジュアル機能を活用して非識字層も取り込みつつ需要層を拡大した、という普及の一つの道筋を示した。

研究成果の概要（英文）：This study was considered about the factor of popularization of the series of popular literary works about northern Chinese general families including Generals of the Yang Family, among the culture and society of early modern China. I gained knowledge about the possibilities that real Chinese kin was related to the story structural formulation of those series, and the drama the audio-visual art and literature related to the appearance of the publication with illustration such as “Cheng-hua Shuo-chang ci-hua”, through the investigation about the cultural relics such as stelas and drama reliefs in Shanxi region. Additionally, this study was indicated one of the way of popularization of those series of popular literary works was expanded with the demand by illiterates since the series had the illustration, by the validation of the combination of the knowledge above and “Yang Wen-Guang Zheng-man zhuan” the illuminated manuscript of inner court.

研究分野：中国文学

キーワード：家将もの　楊家将　薛家将　狄家将　明代内府抄本　文物調査　宗族　通俗文芸

１．研究開始当初の背景

明代中後期以降から清代にかけて、唐の薛仁貴一族の薛家将、北宋の楊業一族の楊家将、狄青一族の狄家将、呼延賛一族の呼家将など、北方山西の英雄的武将一族が数世代にわたり「異民族」との戦いで活躍する姿を描く文芸が大量に出現した。「世代累積型」構造をもつ北方系「家将もの」ともいえるこれら一群の文芸作品は、巷間での人気・普及度が非常に高く、近世中国の文化・社会に大きな影響力を持つ重要な存在である。

しかし、その作品自体の出来の拙さや、これらを一ジャンルとして扱うことに対する認知度の低さから、これまで一群の「家将もの」文芸の作品に体系的な光を当てて検証する研究はあまりなかった。また、数少ない先行研究（張清発 2010）にしても、研究の対象が主に「家将もの」の「小説」に絞られている上に、考察の主眼が作品の系統・話柄分類や変遷整理などに置かれており、一連の「家将もの」文芸が出現するに至った文化・社会背景や原動力についての検証は、殆どなされていない。これには、構造形成期にあたる初中期の文学資料が不足していることや、歴史・美術・戯劇といった関連他分野の知見・資料が還元されていないことなどが関係している。そこで本研究は、この状況を踏まえたうえで、小説・戯劇・説唱を含む一連の「家将もの」文芸が文化・社会現象として近世中国に普及するに至った過程と要因を体系的に検証することを企図した。

２．研究の目的

上述の背景を踏まえ、本研究は、薛家将、楊家将、狄家将、呼家将など「世代累積型」構造の北方系「家将もの」文芸が、近世中国の文化・社会に影響力をもつに至った要因を、（１）唐～明初の物語構造形成期と（２）明清の作品量産期という二つの時期・側面から、体系的に考察することを目的とした。

（１）の検証では、唐～明初時期の文学資料の不足を補うために、「北方」と「宗族」という二つの視座を検証の中軸に据え、史学・美術・戯劇といった他分野の文物・文献を新資料として活用すること図った。これにより、物語構造の形成過程を明らかにすると同時に、依然として空白の多い近世北方の社会・宗族の考察という史学分野の研究にも寄与する知見を得ることを狙った。

（２）の検証では、考察対象を「家将もの」の既検証の小説だけでなく未検証の小説・戯劇・説唱などに広げることで、当該ジャンルの作品が、いかなる「世代の挿入・削除」や「話型の組み合わせ」の法則のもと量産され、いかなる地域で創出・受容されたかなどを、整理・検証することを図った。これにより、「家将もの」文芸の大量生産・消費現象の持つ意味や、未解明部分の多い近世中国の基層文化についての諸相の一端を浮かび上がらせることを目指した。

３．研究の方法

（１）（２）の検証を平成 25 年度～平成 28 年度の４年間にわたり、並行して進めた。

（１）唐～明初の物語構造形成期：「家将もの」文芸の形成過程の検証を困難にしていた大きな原因である資料不足を解決すべく、山西一帯に伝存する薛家、狄家、楊家の石碑をふくめる唐～明初の文物の調査を複数回おこなうことを研究手法の主眼においた。実際の文物調査にあたっては、現地研究機関の協力を仰ぎつつ、他領域の情報・知見も取り入れるべく、史学・美術・戯劇分野の研究者と共同で調査をおこなった。ここから得られた情報を整理しながら、文献資料と対照検証することで、新たな知見の獲得を図っている。

（２）明清の作品量産期：明清期に大量に生産された「家将もの」文芸であるが、「世代累積型」の構造が最初に見えるのは、明後期の『北宋志伝』や『楊家府演義』など楊家将の作品においてである。また、これら楊家将の作品は、後発の呼家将、狄家将、薛家将などにも強い影響を与えている。そこで量産期については、「家将もの」文芸の先駆的・原典的立場にある楊家将の明清資料群（新出資料を含む）を出発点として主な検証を進めた。

４．研究成果

平成 25 年度、平成 26 年度、平成 27 年度、平成 28 年度の四年間でおこなった検証で、下記の成果を得た。

（１）唐～明初の物語構造形成期の検証：山西のフィールドワークを主として

唐～明初の物語構造形成期の資料不足を補いつつ検証を進めるべく、平成 25 年度夏と平成 28 年度夏の二度、山西に赴き文物調査をおこなった。平成 25 年度は山西大学歴史系の協力のもと、美術史を専門とする Hong JeeHee 氏（Syracuse University（当時））および東洋史を専門とする飯山知保氏（早稲田大学高等研究所（当時））とともに、保徳、侯馬、稷山、平遥に伝存する石碑・戯劇文物の調査をおこなった。平成 28 年度は山西師範大学戯曲文物研究所の協力のもと、飯山知保氏（早稲田大学文学部東洋史）および戯劇を専門とする段金龍氏（山西師範大学戯曲文物研究所）とともに、霊石、孝義、汾陽、文水、太原に伝存する石碑・戯劇文物の調査を進めた。結果、「家将もの」文芸の構造形成

に関連する下記の情報を採取することができた。

①平遙県清虚観の唐代薛氏墓誌銘２基：
　平遙の清虚観の碑廊に伝存する薛義「大唐薛君墓誌銘」および薛力「平遙県薛府君墓誌」を調査。墓誌銘の記載によれば、両者ともに籍貫は絳州龍門であり、同郷の薛仁貴と何らかの繋がりがあったことが推定される。山西地域における唐代薛氏の広がりを示すこの２墓誌銘の存在を、大中７年（853）繋年の「唐司徒薛平碑」残碑に薛平（薛仁貴の曾孫）が二神人に遭遇したという説話的な記述が見えること（平成 24 年度に山西万栄県北薛村で調査）と併せて考えると、実在の絳州龍門薛氏という宗族が薛仁貴説話および薛家将の物語の構造形成・流布に何らかの関与をした可能性が指摘できる。このことは、山西地域における薛家将文芸を含めた戯劇文芸の隆盛と広がり示す下記②④の調査結果からも裏付けられる。

②侯馬の明代王進墓に見える金代墓碑、侯馬董氏金代墓、稷山段氏金代墓：
　調査により、侯馬明代王進墓の両側に残存する金大定 23 年（1183）繋年の碑文に、元刊雑劇『薛仁貴衣錦還郷』といった戯劇のモチーフにもなっている「衣錦還郷」の文字が刻まれているとの情報を採取。また、候馬の大定 15 年（1175）金代董氏墓と稷山の金代段氏墓において、戯台・戯俑・戯劇レリーフを調査。このうち侯馬董氏墓の武将の戦闘姿を描く戯劇レリーフや、稷山段氏墓の将軍に拝跪する下士官を描く戯劇レリーフ等が、元刊平話の挿画（『全相三国志平話』他）や明成化説唱詞話の挿画（『花関索伝出身伝』他）の構図と酷似しているとの新知見を発見。これらの情報は、戯劇という視聴覚文芸・文化の隆盛が、元刊平話や成化説唱詞話といった視覚機能を備えた挿画入り通俗文芸の出現に、何らかの連続性をもっていた可能性を示している。ことに、成化説唱詞話に「薛家将もの」に属す『新刊全相唐薛仁貴跨海征遼』が含まれていることは、本検証にとって極めて示唆的である。

③文水県西槽頭郷狄家社村狄青家廟の元代碑：
　狄青家廟に伝存する元の元貞２年（1296 年）繋年「狄武襄公祠堂■」を調査。その碑陰には、狄青から元の狄家一族までの系譜が刻され、碑陽には狄家社の人々が市を設け、その市が祠堂の祭祀に関わっていたことなどが記される。②④に示されるような山西地域における戯劇文芸・文化の隆盛と広がりといった背景を考慮する時、市などの経済活動と狄家の祭祀が関わっていたことを示すこの情報は、実在の宗族の伝承と狄家将文芸の繋がりやそれらの伝播の状況を考える上で、重要な手がかりとなり得る。

④戯劇関連の諸文物：
　稷山清流寺立寺殿の戯劇壁画、平遙城隍廟の戯台、霊石県王家大院の模擬戯台、孝義市皮影木偶芸術博物館の戯台及び戯劇碑文、太原市晋祠の戯劇壁画など、戯劇関連の文物を複数実見調査。これらは、宋代以降の山西地域における戯劇文化の隆盛と普及の様子を如実に伝えており、①②③の検証を側面から支える重要な情報である。

　現在、上述の①～④の知見や情報を整理しながら、文献資料との対照検証を続けている。とくに②の検証は、視覚機能を備えることで非識字層にも大きな訴求力をもつ「戯劇」と「通俗文芸の挿画」という二つの文芸・文化の関わりを考えるものでもある。この検証が進めば、視覚文化が通俗文芸の形成・発展に果たした役割の大きさを示すことにもなり、未解明部分の多い基層文化の一端を文学・美術・歴史の分野から明かにすることにも繋がるだろう。それらの知見は、今後順次発表する予定であり、また、その一部はすでに授業（愛知教育大学「中国芸術文化論」等）内容などに還元している。

（２）明清の量産期の検証：

　量産期については、「家将もの」文芸の先駆的・原典的立場にある楊家将の明清資料群（新出資料を含む）を出発点として、主な検証を進めた。結果、下記の成果を得た。

①「家将もの」「世代累積型」構造の出現土壌の分析（H25～H26 年度）：
　「世代累積型」の構造をもつ「家将もの」現存作品のうち、明代の万暦前後に刊行された『北宋志伝』と『楊家府演義』は、出現時期がもっとも早い作品である。両小説は、編集・刊行時に同じ「旧本」を利用したことが指摘されており、内容や構造に共通部分が多い。そこで、両者に見える「世代累積型」構造が如何なる土壌のなかで育まれたかを明かにすべく、「旧本」についての分析をおこなった。結果、両小説が編纂時に利用した「旧本」が、基層文化に近い虚構性の強い詩讃系詩話に類するものであったことを指摘。そこから、「世代累積型」構造が基層文化と密接に関わりながら構築されてきたという一つの俯瞰図を提示した。北京大学図書館における『楊家府演義』版本の実見調査（H25 年度）の情報も活用しつつ得たこの成果は、「『北宋志伝』と『楊家府世代忠勇通俗演義傳』―その編著者、旧本、前後関係について」（『名城大学人文紀要』105、2014）としてまとめた。

②明代楊家将作品の構造分析と、楊家将文芸の総合的検証、明清時代の文化・社会の総括的把握（H26～H27 年度）：
　上記①の検証と並行して、明清期に出現した「家将もの」の原典的立場にある『北宋志

伝』の日本語翻訳を進めることで、従来の原文確認だけでは見落とされていた物語構造の再把握と話柄の詳細な検証をおこなった。同時に、楊家将文芸全体の検証を複数の目から総合的に進めるべく、楊家将のA構造形成期、B戯劇、C伝播・普及・版本他などの諸問題について、計15名の中国文学・歴史学の研究者と共同で論じた。前者の成果は『完訳楊家将演義』上下（2015、勉誠出版）、後者の成果は『楊家将演義読本』（2015、勉誠出版）として刊行された。これらは、日本ではまだ認知度の低い「家将もの」文芸に関する知見を社会に還元するものでもある。

さらに、これらの作業と並行して進めた北京大学版『中華文明史』の翻訳作業では、明清時代の諸方面の文献を多数調査する機会を得、「家将もの」量産期にあたる明清時代の文化・社会・歴史背景を総括的に把握することとなった。本成果は、『中国の文明７　文明の継承と再生』明清-近代上巻（潮出版社、2016）として出版された。

③播州楊氏と楊家将文芸の形成について：（H25年度）

本研究の着手以前に、研究代表者は、楊家将の物語構造の形成に実在の宗族・播州楊氏が関わっていたことを明らかにした。一方、「家将もの」量産期と同時期に刊行された『征播奏捷伝』（明万暦31年序刊）は播州楊氏の反乱「楊応龍の乱」を題材とする作品である。本研究では、明代という「家将もの」量産期における楊家将と播州楊氏の関係も把握すべく、『征播奏捷伝』の出現背景を検証した。その結果、『征播奏捷伝』の挿画の検証を通して、従来不明であったこの作品の刊行者が、楊家将に関する詳細な情報をもつ金陵の書誌であった、ということを指摘することができた。その成果は、中国語論文「《征播奏捷伝通俗演義》的挿図与其出版背景」（『2013年明代文学国際学術研討会論文集』、2015）などに結び付いた。

④明代内府彩絵抄本『楊文広征蛮伝』の検証（H27年度～H28年度）

楊家将の明清資料群のなかでも特に注目されるのが、国内外で研究が未着手状態にある彩絵抄本『楊文広征蛮伝』（東洋文庫）である。この作品は、『北宋志伝』『楊家府演義』の明の二つの小説には見えない内容と構造をもち、「家将もの」研究にとって重要な意味を持っている。そこで、この資料の出自・製作年代を明らかにすべく、明内府彩絵抄本『大宋中興通俗演義』（中国国家図書館）、着彩挿画を持つ世徳堂『大宋中興演義』（同前）、明内府彩絵抄本『外戚事鑑』（東洋文庫）、明内府彩絵抄本明内府彩絵抄本『明解増和千家詩註』（台湾故宮博物院）、明内府彩絵抄本『真禅内印頓證虚凝法界金剛智経』（台湾故宮博物院）、明内府彩絵抄本『太乙集成』（斯道文庫）との比較実見調査と周辺の文献の調査をおこなった。結果、『楊文広征蛮伝』が明万暦前後の内府で準識字層である後宮の女性らを対象として作成された可能性が高いことを突き止めた。これにより、物語形成期に基層で醸成された「家将もの」文芸が、明清量産期には、絵画という視覚機能を活用しながら宮中という上層にまで需要層を拡大していたとの新知見を得た。本成果の一部は、平成28年12月に中部地区中文交流会で「楊家将故事の新資料『出像楊文広征蛮伝』について」として口頭発表した。

（１）（２）の検証結果のうち、（１）②や（２）④は「家将もの」文芸が、戯劇や挿画入り書籍といった視覚機能を有効活用しながら非識字層を取りこみつつ普及していったことを示しているだろう。とくに、（２）④の知見は、「家将もの」文芸が近世中国で影響力を持つに至った一因を示唆していると同時に、中国の基層文化と上文化との関係を考える重要な視点を提供するものである。こうした視点は、「家将もの」文芸のみならず通俗文芸の発展全体を考える際にも有効であるため、彩絵抄本に関する検証は、今後も幅を広げて継続していく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）

①松浦智子、「『征播奏捷伝通俗演義』の挿画について」、『中国古典文学挿画集成（十）し小説集〔四〕』、査読無、2017、pp.39-52

②松浦智子、「《征播奏捷伝通俗演義》的挿図与其出版背景」、『2013年明代文学国際学術研討会論文集』、査読無、2015、pp.1006-1017

③松浦智子、「『北宋氏伝』と『楊家府世代忠勇演義伝』-その編著者、旧本、前後関係について」、名城大学人文紀要、査読有、105、2014、pp.67-84

〔学会発表〕（計　３　件）

①松浦智子、「楊家将故事の新資料『出像楊文広征蛮伝』について」、中部地区中文交流会、2016年12月16日、名城大学理工学部研究実験棟Ⅱ（愛知県名古屋市）

②松浦智子、「明代両個宗族六合楊氏、代州楊氏和北虜-“楊家将小説”形成的一個背景」、明代文学思想与文学文献学術研討会暨中国明代文学学会第十回年会、2015年8月20日、北京稲香湖景酒店（中国北京市）

③松浦智子、「《征播奏捷伝通俗演義》的挿図与其出版背景」、中国明代文学学会（籌）第九届年会暨2013年明代文学与文化国際学術研討会、2013年8月25日、復旦大学光華楼西主楼1001会議室（中国上海市）

〔図書〕（計　4　件）
①松浦智子、北京大学版『中国の文明７文明の継承と再生』明清−近代上巻、2016、総ページ数 497p.
②岡崎由美・松浦智子、『完訳 楊家将演義』上巻、2015、総ページ数 331p.
③岡崎由美・松浦智子、『完訳 楊家将演義』下巻、2015、総ページ数 284p.
④岡崎由美・松浦智子・その他、『楊家将演義 読本』、2015、pp.22-45

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
松浦　智子（MATSUURA Satoko）
名城大学・理工学部・助教
研究者番号：40648408

(2)研究分担者
無し
研究者番号：

(3)連携研究者
無し
研究者番号：

(4)研究協力者
無し
研究者番号：